

昭和40年明治大学卒業後、ニッタン(株)入社、平成16年同社退社。

私の川柳事始め

私の川柳・・・孫帰り残した鶴の先を折る・・・が、ラジオ番組に入選したことが同窓会で話題にされた。何が根拠か知らないが、学生時代の私からは全く想像できない、と大半の連中が口を揃えた。

座もアルコールが回り、賑い始めた頃、旧友のひとりが言った。「悠々とリタイアできて川柳家、か。余裕だな。退職金もたんまり入って・・・。可愛い孫の顔も見たし、もう思い残すことはないって心境か」私は、皮肉めいた口調に一寸腹が立ったが、ビールを啜りながら聞き流した。たかが十七音字、されど十七音字。誰が何と言おうが、いまの私には日々の支えである。

私と川柳との出会いは、ひよんなことからであった。退職して一年近くたった頃である。たまに友人から内職の誘いがあったりしたが、応じる気にもなれず、と言って、具体的にやることを持ち合わせているわけではなかった。現役の時に買い集めた本も、いざ手にしようとしても集中できない。身の雑事も限られたものであり、時間も身体も少々持て余していた。

そんな折、思わぬ機会が訪れた。町の公民館で文化活動をPRする一日公開講座が催され、私は妻を車で送ることになった。

公民館に着くと、妻はさっさと自分のコーラス仲間と姿を消し、私はひとり取り残された。仕方なしに、手持ち無沙汰の私は、ロビーに展示されている児童の絵や習字を眺めながら、うろうろしていた。

その時である。「よろしかったら、いかがでしょうか。これから始まる場所ですから」声をかけてきた男の人から、私は一枚の

パンフレットを手渡された。「誰にでも出来る川柳」とある。一瞬、私はたじろいだが、その人の柔和な眼差しに誘われるように、会場について行った。後になって考えてみても、よく尻込みもせず講座を聞く気になったものだと、不思議でならない。

—今日はみなさんに、まず川柳とはどういうものかを知って頂こうと思っています。落語の枕に出てくる「居候三杯目にはそつと出し」などと言う一、講師は手馴れた口調で話し始めた。話しが進むにつれ、緊張していた会場の雰囲気も和んできて、私も、五・七・五と指を折りながら、話しに引き込まれていた。こんな世界があったんだ、と思った。何より愉しかった。九十分は、あつと言う間の気がした。

それにしても、妻の運転手をしなかったら川柳との出会いはなかった。自分の過去のどこを突っ突いても、五・七・五などは出てこない。同窓会で旧友達が、私と川柳に意外な顔をしたのも、頷ける気がする。

還暦過ぎてのこの出会いに、私は夢中になった。紹介された入門書を読み終わると、手当たり次第に本を集め出していた。古本市から神田の古書街まで足を運んだ。メモと鉛筆はいつも手元におき、文字通り多読多作に励んだ。やがて、新聞の川柳欄に投句するようになり、没が続いたあと・・・初めて入選した時の感激は忘れることができない。活字になった自分の句を見た瞬間のときめき。何ものにも変え難かった。

私は、定年のあとに非常勤の期間もあり、退職後の過ごし方を考える時間は十分にあった。だが、その時になれば何とかなるだろうと、高を括っていた。その付けが回って、自分のやるものが見つからず頭を悩ませていた。そんな時に川柳に出会えたことは、本当に幸せであった。そして、その切っ掛けをつくってくれた妻に感謝をしなければならない。